

「風景を失うこと」の意味

暮らしてきた場所の風景を失うことの意味の大きさは、まだ語られていないような気がしています。蒲生の海岸に行くと、いつも海を眺めている人に出会います。明らかに、遠くから来たんじゃない人。もともと住んでいたのかなあっていう人たちをお見かけしますね。

話しかける

町内の用事で近所のお宅に訪問するときも、なるべくお話するように心がけています。「3日間誰ともお話をしなかった」という方もいて、堰を切ったようにお話される。被災して遠方から来られた高齢のご夫婦もいて、知っている方も少ないようで、訪問すると喜んでくださいましたね。そのうち、「お茶っこ、飲みさげさいん」って言われるようになって。「遠くの親戚より近くの他人」という具合で、私も嬉しいんですね。

農業を再び始める

農地再生のために瓦礫撤去のボランティアをしています。今年の春から、瓦礫撤去の依頼件数がぐっと増えました。1年が経って気持ちの変化もあったのかな、と思います。「ちょっとでも再開してみようかな」という気持ちが伝わってきます。

お金じゃない価値

「農業は食えない」と実際に農業をされている方がおっしゃいます。だけど一方で、「田んぼで稲の音を聞いたり、収穫の時に穂の匂いを吸い込むのが好きだ。俺はこの地域が好きなんだ。」と戻ってくる方もいる。お金じゃないところに価値を見出しているんです。

覚悟がなくても

「覚悟を持って」という話もありましたが、あまり覚悟がないと自覚している自分からすると、もう少し軽い気持ちで応援したり、そういう気持ちが少しでもある方が参画できるような機会があればいいのかな、と思いました。

伝える

『RE:プロジェクト通信』に出てきている方の話は、そこに住んでいる方にとっては当たり前なんだろうけど、都市部やまちなかに住んでいる人たちにしてみたら、そういう体験は少ないと思うんです。だから読んで、少しでも伝えていきたい。「こういうことがあるんですよ」って。



あの日から、
いろいろ感じたり、思っていることを、
言葉にしてみませんか？
自分の気持ちに、耳を傾けながら。

想う

考える

おしゃべり
する



vol.1

2012年7月29日 日曜日 13時30分より
せんだいメディアテーク 2階会議室にて

〈主催〉 仙台市・公益財団法人仙台市市民文化事業団



「RE:プロジェクト」の情報はこちらから↓

【ウェブ】「RE:プロジェクト」制作日誌 <http://re-project.sblo.jp/>
【ツイッターアカウント】@RE_project

第1回目の「想う／考える／おしゃべりする会」では、こんなことをみんなで話しました。

街の言葉を残す

仙台に暮らしていて、やっぱり普段話しているような事も、記録に残していきたいというか。こういう、一見「こんなことして何になるんだろう」とか、「何につながるんだろう」みたいな話でも、街の言葉としては大切なのかなと思っています。

「戻りたい」の根源

「戻りたい」っていうお話、皆さんされるんですよ。この「戻りたい」気持ちの根源って何なのか、すごく考えさせられています。地域で培われてきた個人の小さな物語も「戻りたい」と思わせる一つなのかもしれないと、『PRE:プロジェクト通信』を読んで思うようになりました。

イグネの役割

「イグネが何を守ってきたか」を改めて感じました。慶長の津波(1611年)があった時には、おそらく既に暮らしがあったんだと思うんですよ。そうした中で、津波の被害を受けた人たちがイグネを植えたのかなあと想像しました。イグネって、家を建てる時の部材になるとか、西側と北側守って暴風や雪を防ぐとか、そこから燃料をとるとか、いろいろ言われているんですけども、もしかしたら“津波から家を守る”こともイグネの役割だったのかもかもしれないと思いました。

話したい

「地域のコミュニティはばらばらになってしまったけど、元の場所に戻りたい」という相談を受けて。どうしたらいいのかわからない人が多いんだと思います。そして、「みんな、しゃべりたいんだな」と思うときがあります。こういう会でもいいだろう。精神的に必要なもののような気がします。

自分の家でやり直す

家屋修繕のボランティアをしています。当初は瓦礫や泥で汚れたご自宅を前に絶望を抱えていた被災者の方が、我々の活動を通して少しずつ、時間とともにご自宅がきれいになっていくのを見て、「希望や可能性を持てるようになってきた」とおっしゃってくださいました。「自分の家、コミュニティに戻って、やり直してみよう」という気持ちになってくださるのに、いくらかでも助けになれているのが喜びです。

寄り添うための覚悟

私は七郷・六郷の風景が好きです。海のそばまで真っ平らなところって全国的にもない。そして、この風景には農業が必要で、だから私は農家の方に「だから続けてください。お願いします。」と言いました。そうすると、「分かった、俺やるよ。」と言ってくれた。そういうのが大事ななと思うんです。つまり、生活と生計があつての風景なので、ただ「頑張ってください」とかキザなことを言ったって、何も変わらない。暮らし続けるというのはものすごくエネルギーがいること。だからこそ「すごいですね」という共感というか寄り添いが大事だと思うんです。そして、それには「覚悟」が必要です。我々の、問いかける側の覚悟。

都市の中でのつながり

行きつけの定食屋さんが「普段皆さんにお世話になっているから、お返ししたい」と、震災後すぐにおにぎりを配っていたんです。それが救いでしたね。農村や漁村にはコミュニティ性って残っていると思うんですが、まちなかもコンビニ中心社会になっているように見えて、「ああいうことが起きると回復する何か」が一人一人の心の中にあるような気がしています。それも信じていたいという気になりました。

「暮らし続けること」の大変さ

私は仕事の関係で引っ越しばかりしていました。自分の経験から言うと引っ越しも結構大変だと思っていたんですが、「同じところに住み続けるほうがエネルギーがいる」と最近いろんな方のお話を聞いていて感じます。特に被災した地域では「俺はここで生きていくつもり」という意志が感じられる。そこでは、先祖も何百年も生きています。言葉で「暮らし続ける」と言うのと当たり前みたいだけど、これはものすごく大変なこと。引っ越しの多い私からすると、羨ましくてしょうがないんだけど。

「変わらないこと」を考える

最近再建を始められた方のお宅にも行く機会があります。周りはものすごく荒れ果てているんですけども、人の暮らしが、荒れたものを整えていってます。そういうことを400年やってきたんだなあっていうことを感じます。だから私は、逆に変わらないものというか、普遍的なことをこの地域の中に見ていきたい。「人がその場所に住み続ける」とは一体どういうことか——この地域がいつも教えてくれるような感覚を持ちながら歩いています。